

秋期大会（1993年11月27日）

## ワイルドの友情論

逢見明久

（駒沢大学講師）

ワイルドは、『獄中記』に書き残している。

The Mystical in Art, the Mystical in Life, the Mystical in Nature—this is what I am looking for.

ワイルドは、常に、神秘的なもの、美しいもの、を探し続けた。その一つが友情であった。ワイルドは、友情を主題にして一つの童話を書き上げ、友に忠実であるばかりに命まで奪われてしまう人物を創造している。そればかりか、実人生でも、友情はワイルドを支配し、破滅させていった。

まるで自分自身の運命を見通しているかのように、ワイルドは、『嘘の衰退』で、ヴィリアンに次のように語らせている。

Life imitates Art far more than Art imitates Life.

『獄中記』に記されている、ワイルドとダグラスの関係は、童話『忠実な友』そのものである。まるで小さなハンスのように、ワイルドは不実な友に献身した。『忠実な友』は、ワイルドがダグラスに出会う前に執筆されている。従って、ダグラスとの交友がこの作品に影響を及ぼしている筈はない。だが、ワイルド自身の芸術と人生の、この一見奇妙な一致は、芸術家ワイルドの生き方に一貫性があったことを示しているに過ぎない。

芸術家ワイルドは、自分の目で確かめた世界しか信じない。その目は、遠い彼方ではなく、自分自身に向けられている。ワイルドは、自分を通して、世界を見詰める。そのようにして得られた世界にこそ、真実があると確信しているからである。ワイルドが芸術家である限り、自己の内側にある真実を見詰めている限り、ワイルドの人生は芸術を模倣する。

童話『忠実な友』の中には、友情が逆説的に描き込まれている。虚偽と真実を織り交ぜたこの童話は、一見すると、忠実な友情に対する痛烈な皮肉のようだが、実は、ワイルド自身の友情への憧れを示していることを見逃してはならない。

このようなワイルドの一面は、童話『忠実な友』の結びで、道徳を説くのは危険だというアヒルの母親の言葉に、作者本人と思われる声と同調する所に表れている。ワイルドは、この声で、道徳家のヒワの語る友情の話が虚偽であることをほのめかしているのである。ワイルドは、ヴィクトリア朝の偽善的道徳に強い嫌悪感を抱いていた。道徳家のヒワは、言わば、その象徴である。

ワイルドは、『獄中記』のなかで語っている。

Morality does not help me. I am a born antinomian.

愛は道徳を受けつけない。道徳は、愛ではない。道徳は、利己主義の一形態でしかない。道徳は、何も見ていない。ワイルドは、そう警告している。ワイルドは、友情が自分の中にあり、多様な魂の数だけ友情は存在し、一定の定義の下で、押し付けるものではないことを知っている。自分の魂を見詰めることが、友情を知る唯一の手段であると語っているのかもしれない。

ワイルドは、個性を認めない道徳の虚偽を暴露しているのであり、決してハンスを犬死にした愚か者として描いてはいない。ハンスは、たとえ貧しくとも、心はいつも満たされていた。無私であり、素朴であった。ハンスは、自分の庭を眺めて、鳥たちの囀りに耳を澄ますことが好きだった。花たちの与えてくれる豊かな色彩や香り、そして、鳥たちの歌声が、四季の移り変わりと共に様々な美を形造って行くのを感じるだけで、ハンスの心は調和していた。ハンスは、美しいものを見たり聞いたりすることを愛しているだけだった。まさに、そのために、偽りの友情のために死んでゆくのである。こうしたハンスの心の豊かさこそ、ワイルドにとって、真実なのである。

ワイルドは、まさにハンスのように生き、ダグラスへの友情を買おうとした。ただひたすら親友に愛を注ぎ込むだけで、友人を自分の思うがままに操り、何かを得ようとはしなかった。自分の行為が、まったく無分別なことだと分かっているにもかかわらず、ひたすら、愛することに喜びを探し求めた。すべては、自分自身の真実に忠実であろうとしたためである。ワイルドにとって、愛する心を失うことは、美神を奪われることを意味していたからである。それゆえ、ワイルドは、愛そのものになろうとしたのである。ワイルドは、『獄中記』に書き記している。

For my own sake there was nothing for me to do but to love you.

ワイルドは、『社会主義下の人間の魂』で、キリストの個性主義的な生き方に愛の秘密を見いだしている。それは、ワイルドがハンスに託した友情の秘密を説き明かしてくれる。

無私で素朴な、小さなハンスの生き方は、まさに個性主義である。その美しさは、ワイルドの魂に起因している。芸術家ワイルドの友情は、プラトンの頭脳とキリストの心を合わせ持った個性主義といえる。それは、けっして燃え尽きることのなかった幸福な王子の鉛の心臓のように、外見からは見極めることはできない。それゆえに、人々はそれを投げ捨てるかもしれない。だが、心の豊かな人々には、それは理解されるだろう。

## ワイルドとペーターの『ルネサンス』

—「芸術」と「自然」、批評論について

木村克彦  
(作新学院大学助教授)

模倣は芸術か。ワイルドをペーターのエピゴーネンとする向きは多々あった——ワイルドはペーターを誤読し云々——否、誤読したのではなく、おそらくは模倣から、ワイルドは出発したのだ。それが模倣に終わらなかったことが、ワイルドをワイルドたらしめている。彼自身言う。「模倣の終わるところにのみ芸術は始まる」(『獄中記』)。問題は多岐にわたるので、今回は二点に絞りたい。

### (i) 「芸術」と「自然」

ワイルドは「嘘の衰退」において、自然を芸術よりも低位に置いた言わば「自然蔑視」の態度をとり「自然などどうでも良い」とか「自然が芸術を模倣する」とまで言い切ってしまう。『ルネサンス』にも「自然軽視」とも思える言が何箇所かあるが、私たちはそれらがペーターその人の自然観ではなく、ヴィンケルマンやグリムからの引用であること、また、ペーターが他者を評しての言であることに傾注すべきである。実際ペーターは「序論」や「ダ・ヴィンチ論」で自然の美の重要性を説いている。また「ジョルジョーネ派」を良く読んでみると、ペーターの真意は、こと芸術家が自然を創作の対象としたときには、その主体を芸術家の方に置き、自然はあくまで素材となる——但しそれは美や力を有した素材であり、芸術家はそれらを表現し得る精神を持たねばならぬ、ということらしい。ところがワイルドとて真意は同様かもしれない。ワイルドの自然蔑視の発言は全て「嘘の衰退」中の言であり、それらは文字通りワイルドの嘘・ポーズなのである。「ラヴェンナ」においては自然の美を大いに称讃し、『獄中記』では「自然とともに生きるべき」とまで言っているからだ。ワイルドは『ルネサンス』を自己のものとして消化し、「自然蔑視」という仮面を被ったのである。